



常磐会短期大学 教授 <sup>しめだ しんいちろう</sup> 卜田 真一郎 さん  
元保育士 <sup>さかもと あきこ</sup> 阪本 明子 さん

人権保育専門講座では、今年度も連続講座を開催しています。第2回は、11月18日に元保育士の阪本明子さんをゲストスピーカーにお招きし、4歳児の実践報告「いっしょに修行しよか！」を中心にお話いただきました。



### 実践報告より (阪本さん)

子どもたちは、様々なことに興味をもち、あそびが広がっていく一方で、自分を基準に「できないくせに」と仲間を見下すことで自分の存在を誇示する姿がありました。そのような姿を克服していくために、子どもたちのなかに「修行中」という共通言語を育んでいきました。その取組を通して、できないから諦めようとしているときには、「修行してみよう」とはげましたり、できるからと周りを見下しているときに「まだまだ修行がたりん」と周りが返したりする子どもたちが出てきました。また、「できないくせに」との捨て台詞に、腕力や泣くだけの抵抗を見せていた子どもが「修行してんねん」と返す姿がありました。

以下は、実践報告後の講演内容の抜粋です。

### 保育現場での課題意識から (卜田さん)

「能力主義」という言葉は、今こそ保育のなかで意識していく必要があるかもしれません。能力主義的なものの見方、つまり、「できることがよくて、できないことはダメという価値観」は、子どもが自分と相手のことを比較できるようになってくる3歳後半から4歳ころに出てきます。それは社会のなかに、そのような価値観があるからです。今の地域社会では、能力主義的な考え方が強い風潮があります。勝ち組になれば居場所があるけど、そうでなければ生きづらい、そういう社会に次第になってきているように感じます。「一人でやっていく力を身につけていくことが教育・保育なんだ」という考え方が社会全体を何となく覆っています。それができなければ、「あなたが悪い」と、自己責任で片づけてしまうような社会の雰囲気があります。そのベースにあるのは、能力主義に基づいた学校改革です。競争社会に打ち勝つための力をつけることが保育・教育だと言われている風潮に、私は危機感を感じています。

幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿では、「自尊感情」ではなく「自立心」がはじめに出てきます。「自立心」のなかの「自尊感情」という位置づけです。自立することがすばらしいという価値観やその位置づけに違和感をもちます。



### 卜田さんと阪本さんとのトークセッション (抜粋)

卜田さん：自己責任論や能力主義的な考え方は、解放教育・保育のなかで大切にしてきた「人は一人では生きられない。いかに頼れる仲間を増やしていくのか」という視点を、真っ向から否定する危険性があります。その考え方に縛られるなかで、自信を失っていく子どももいます。「どう自己責任を超えていくのか」が大切になってきます。そのような観点からいうならば、「修行中」という言葉を共通言語にしていく阪本先生の実践は、できるか・できないかという結果で判断するのではなく、それぞれのペースでできるようになっていくという「人間の力を信じる」という実践ではないでしょうか。

阪本さん：難しいことは言えませんが、私は「できなくても、やろうとしてる・やっていることが、かっこいいやろ」という気持ちで「修行中」という言葉を使っていました。それは「できることがいい」と思ったらいけないということではありません。私もそうですが、人間は誰でもできるようになりたいです。向上心は大切です。だけど、その向上心で、人や自分を傷つけるような思い方は止めましょうということ子どもたちに伝えていきました。



卜田さん：なるほど、できるようになる価値、そのものは否定できないですね。ただ、できる・できないという結果ではなく、それに至る過程（プロセス）を大切にしようということですね。それによって人や自分を傷つけない見方・考え方を子どもたちの内面に育てていく。それを「能力主義的な価値観はだめだ」と直接伝えるのではなく、「修行中」という言葉を共通言語にすることで、「頑張ることは大切だよね、でも、それぞれが今のそれぞれのところで頑張っていることを認めていく」ということですね。すばらしい実践だと思います。